

心の成長を支援する美術科指導

〇〇〇立〇〇〇〇高等学校 〇〇 〇〇（芸術科 美術）

1 はじめに

私の勤務校及び前任校の生徒は、その多くが劣等感を抱えているように見える。ある者は現実から目をそらし、ある者はより低きを探し、そこから逃れようとしている。アンケートを取れば、「絵がうまくなりたい」と多くの生徒が答えるだろう。熱量の高い食べ物を無条件に美味しく感じるのと同様に、自らの成長に喜びを覚えることは生き物として誰しもが持っている性質であり、できることを増やすことは「できない」という無能力感をひとつ解消できるからだ。また、「美術は楽しい」という回答も少なくないだろう。座学ではないからだ。そこで喜んでいいのかは、疑問が残る。

自分のことを顧みる。私は体育が苦手だった。体育の時間は気が重かった。卒業して思った。少しでも速く走ったり、新しい技を覚えたり、上達したりすることよりも「体を動かすことの楽しさ」を、体育の授業で私は知りたかった。優れていなくてもいい。運動は健康増進に役立つものであり、楽しむものなのだと思えるようになったのは、社会人になってからだ。

実は体育科の同僚にこの話をしてみたが、全く理解されなかった。その時に思った。私は美術において、同じことを生徒たちにはしてはいないだろうか？言葉を美術に置き換えてみると、少しぞっとする。目標は、逆に不満や萎縮を育ててはいないか。「できるようになる」のはそれほど大切か。描きたいという気持ちはどこからくるのか。美術で私は彼らに何を伝えたいのか。それをこの数年、考えてきた。

昔の美術の教科書（*1）に、「肘から先で絵を描くのではない。むしろ、肘から上（心）で絵は描かれるものだ。」という文がある。「心で描く美術」、私が求める答えのひとつは、この線上にあるように思えた。それとともに、「高校生が学校で美術を勉強すること」の意味に、いま一度立ち戻りたいと思った。

心理学によれば、高校生という時期は、撒き散らしていた感情を整理し、社会という共同体の許された枠の中で適切に表現する方法を学習する「枠に収めていく」時期なのだという。作品もひとつの枠であり、提出期限もまた時間という枠である。

「授業」という決められた時間と場所で生徒は制作し、教師と対話する。それらの活動を通して生徒は自分と向き合い、個性を発見し、自己という枠を積みあげる。教師は授業の場でその作業の道行きを見守る。「その在り方は、とてもカウンセリング的だ」とある臨床心理士に言われてはとした。私たち美術の教員が自然に行ってきたこれらのことこそが、美術が高等学校の教育課程の中で必要とされ、存在するべき理由のひとつだといえるのではないだろうか。

干潟には干潟に生きる生物がいるように、野辺には野辺に咲く花がある。「私は私である」と確かに信じるには、まず自らの個性を知り、自己理解をすすめることだ。美術の科目性を活かし、制作指導を通じて生徒とかかわり、一人ひとりの心の成長を支援する。それは私たちがし得る、ひとつの価値ある役割なのではないか。本研究を通し、そのことについて改めて考えてみたい。

2 実態調査

授業研究に先立ち、生徒の心の状況（ストレス度）と美術や授業についての考えを知るため、実態調査を行った。調査にあたっては、精神衛生を計る尺度である GHQ（12 項目版）及びソー

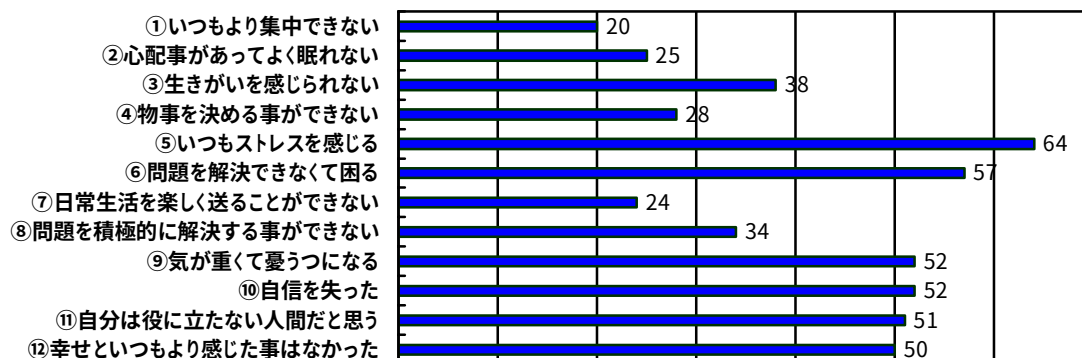
シャルサポートを参考にした。

実施時期：2007.9.5 ～ 21（9月初回授業）

回 答 数：1～3年美術選択 122名（男：女＝68：54）（1年：2年：3年＝49：57：16）

（１）ストレス度調査結果（「ある」１点「ない」０点で集計）

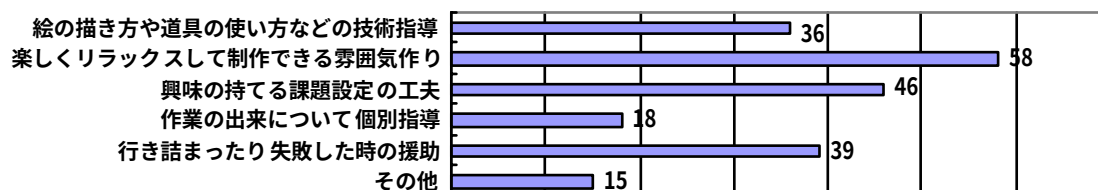
平均得点 4.16 学年別平均 1年 3.98 2年 4.11 3年 4.88 （表１）



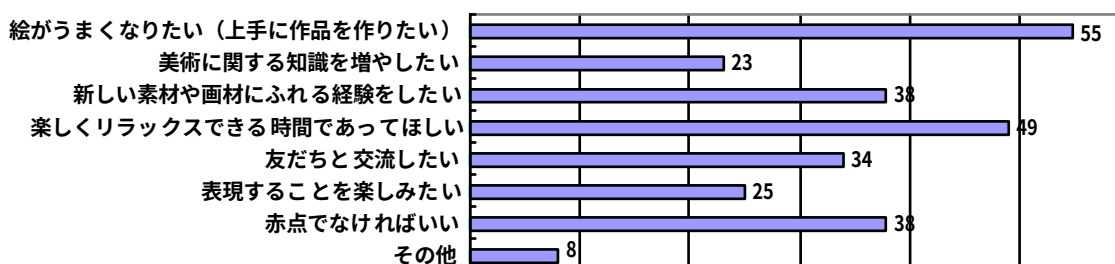
（２）アンケート結果

ア 思ったことをうまく言葉にできないような気持ちになることがある 72人（59.0%）

イ 美術の先生に期待すること（複数回答） （表２）



ウ 美術の授業に期待すること（複数回答） （表３）



（３）考察

ストレス度については健常群の平均とされる数値からすると高いが、夏期休業が明けた直後の調査であったことから、ストレスが高いと答える率が上がったのではないだろうか。また質問項目は本校の実情から考えて、もう少しかみ砕くべきだったと思われる。従って GHQ の検討は、校内及び項目別の比較のみとする。

学年毎に比べると、3年が最も高い。進路活動が盛んな時期で、個々に抱える不安やストレスが高いことがうかがえる。男女別では女子の方が高い。項目別では特に性による差は感じられない。⑤⑥⑨⑩⑪⑫が多く、自己効力感が低いという印象を裏付ける。

「思ったことをうまく言葉にできない」と答えた生徒は 72 人で全体の 59.0%だった。この設問の回答群別の GHQ 平均点は「言葉にできない」群 4.71 点、「言葉にできる」群 3.17 点だった。ストレス処理がうまくいかず、ストレスを溜めている様子がうかがえる。

「美術の先生に期待すること」では「楽しくリラックスして制作できる雰囲気づくり」「興

味の持てる課題設定の工夫」「行き詰まったり失敗した時の援助」が多かった。情意面のサポートへのニーズが強く感じられる。

「美術の授業に期待すること」では「絵がうまくなりたい」「楽しくリラックスできる時間であってほしい」「新しい素材や画材にふれる経験をしたい」「赤点でなければいい」に回答が多かった。「赤点でなければいい」の高得点は消極的な授業態度の表れと取ることもできるが、「赤点でない」という安全圏にまず身を置き、不安を解消したいという気持ちとみることもできる。

全体を通じて、生徒の多くが自己効力感が低く、いろいろな面で不安を抱えているといえる。自己実現への欲求はあるが、自信のなさや、実現への手立てや見通しが立てられないことから、確たる行動がとれないでいると思われる。指導者はこうした漠然とした不安を理解し、対応する必要があるといえる。

3 授業計画

高等学校学習指導要領解説（H11.12）には「芸術科は、感性を高め、豊かな情操を養うことを通して心の教育に深くかかわっている」とある。美術については科目の性質として定義付けられた三つのうち②、③に「文化・人間理解、コミュニケーションとしての科目性」「心の教育としての科目性」があげられている。また、中教審の新学習指導要領答申（H20.1）では、知識・技能を活用する「思考力・判断力・表現力」や「豊かな心」を育むために、体験を通して感じたことをふり返り、共有するための表現活動特に言語活動の充実が必要とされている。美術においては「感じ取る力や思考する力をいっそう豊かに育てるために」「自分の思いを語り合ったり」する鑑賞の指導を重視する、とある。

また、博報堂生活総合研究所の調査（2007）によると、現代の子供たちは「学校では友達と緩くつながっていたい。興味関心の場で自分を育てたい」という欲求を持っている。

そこで3年でグループワークを行い、言語を使った自らの表現のふり返りと、作品を通した他者との交流を試みる。また学年進行に伴い、段階的に自己理解がすすめられるよう留意した。

科 目	美術Ⅰ（必修）	美術Ⅱ（必修）	美術Ⅲ（選択）
学 年	1	2	3
実施月・時数	4～7月（18h）	4～7月（18h）	9～1月（20h）
单元名	自画像 －自分と向きあう－	不思議な世界を表現する －心的内的世界への気づき－	自分自身をテーマに描く （ただし自分の顔を描かない） －より深く自分を見つめ直す－
技法・素材	アクリル画 F6 キャンバスボード	フォトコラージュによる構成 および点描 B4 ケントボード	油画 F8 キャンバス
題材の評価規準	・自分と向き合い、観察による表現や自画像の美しさに関心を持ち、主体的・意欲的に制作し、その喜びを味わおうとする（関心・意欲・態度）。 ・観察による表現や自画像について理解をし、よさや美しさを感じ取り、感性を働かせて表現を工夫する。（表現の工夫） ・観察による表現の基礎的な技能及びアクリル画の基礎的な技能とアクリル画を効果的に表現する方法を身につけ、自画像の創造的な表現に役立てている（表現の技能）。 ・自画像の特徴について理解し、自画像のよさや美しさを味わうことができる。（鑑賞）	・点描の美しさやイメージの視覚化に関心を持ち、根気よく意欲的に制作し、その喜びを味わおうとする（関心・意欲・態度） ・シュールレアリズムの表現や点描の表現効果を学び、よさや美しさを感じ取り、感性を働かせて自己の表現を工夫する。（表現の工夫） ・シュールレアリズムの技法及び点描画の基礎的な技能を身につけ、創造的な表現に役立てている。（表現の技能） ・シュールレアリズムの技法を用い、効果的で独創的な構成ができる。（表現の技能）	・「自分」を絵画によって表現することに関心を持ち、主体的・意欲的に制作し、その喜びを味わい、自己理解に役立てようとする。（関心・意欲・態度） ・主題について深く考え、ふさわしい画題を選び、意欲的に表現しようとする。（関心・意欲・態度） ・感性を働かせ、自己の個性をふり返って豊かに発想し、主題に沿って構想をまとめ、創造的な表現の工夫を重ねることができる。（表現の工夫） ・油画の基礎的な技能を身につけ、構想を効果的に表現するための方法を知り、表現に役立てている。（表現の技能） ・主題について理解し、絵画表現のよさや美しさを味わうことができる。（鑑賞） ・グループワークに積極的に参加し、作品を味わい、作者の心情を思い、興味・関心を深くもつことができる（鑑賞）（関心・意欲・態度）

4 授業研究

(1) 自画像 ―自分と向きあう―

ア 題材設定の理由

ほとんどの生徒は自画像を嫌がる。逃げず、うつむかず、背筋を伸ばして自分と謙虚に相対するより他に道はない。入学間もない生徒たちに、この課題を通してそのような姿勢を涵養したい。心理的には、自画像は「こうありたい自分」が出るのだそうだ。作品からは顔のパーツや髪型へのこだわりが強く感じられる。この課題を通し、そのような自分の意識にも気づいてもらいたい。

イ 展開

(ア) 鉛筆デッサン

(イ) 下地

下地になるとは説明せずに3色(白黒以外)選ばせ、紙パレットに3cmくらい出させる。ジェッソと混ぜるようにしてローラーでボードに斑になるよう着色し、そのまま背景にする。

(ウ) 着彩

(写真1)

(写真2)



(2) 不思議な世界を表現する ―心的内的世界への気づき―

シュールレアリズムの手法を用い、フォトコラージュで画面を構成し、点描で仕上げる。

ア 題材設定の理由

写真を使うため、形をとるのが苦手な生徒も興味を持って取り組める。「自分」という言葉の入った主題ではないが、どんな主題でもコラージュにより心の内が出るものと聞く。シュールレアリズムは超現実、精神世界の表現を旨としており、結果的に自らの心の中を表現したものとなる。点描で仕上げる理由は次の二つである。①点描という作業を経ることで、より作品としての独自性が付加される。②一時的な感情の発露であるコラージュを、時間をかけて仕上げるにより貼った当時の自分と静かに向き合うという心理的效果が期待される。

イ 展開

(ア) 用意するもの

コラージュ	古雑誌 はさみ カッター のり B4 画用紙(コラージュ台紙)	材料費
点 描	B4 両面ケントボード 2mm 厚 水性ピグマペン 0.1, 0.3 鉛筆	600 円弱

古雑誌は図書室より譲り受ける。平成 19 年度使用:オレンジページ, RORDSHOW, ぴあ, Number, アサヒカメラ, おしゃれ工房。写真が大きく、はっきりしたものが適している。

雑誌・資料等すべて生徒自身に用意させる方が望ましいが、本校では「手ぶらで来ても授業が成り立つ」環境を整えている。こちらが用意したもので思うようなものがなければ、自分で持ってこさせる。切り取れない資料はコピーして使う。縮小・拡大、複数使用したい場合もコピーを使う。近年、インターネットで画像を探してくる生徒が増えた。

(イ)「シュールレアリズム」と技法の説明:難しい言葉が出てくると、生徒は途端に興味を失う。

「見たことのない」「夢の中で見るような」「一枚の写真では撮れない」不自然な世界を描くための手段として写真を切り貼りし、組み合わせして下絵を考えるのだと繰り返し説明する。

(ウ) 写真探し

(エ) 台紙の上で構成

・意外な組み合わせをつくるコツ:「大きいものが小さく、小さいものが大きくなっていたら」

「ありえないものがありえないところから出てきたり、あったりしたら」

- ・ 漫画的な「面白さ」との違い ex. 美女の足だけスネ毛に差替え → 造形的には面白くない
- ・ 好きなものだけを集めて並べたカタログにならないように
- ・ 作品の中でお話をつくらなくてもよい（説明できなくてよい）
- ・ 文字や言葉は使用しない → 言葉の意味に頼った作品になる



◆制作の波にのれない生徒には：「〇〇くらいの大きさに△個写真を探してきたら呼ぶように」等、短く具体的な指示を出す。発達障害的な要素を持つ生徒は「終わりのない作業」に拒否感を抱き、最初から投げ出してしまふ。短く具体的な行動を示されると動くことができる。

（写真3）

（オ）のりで貼る → コピー（2枚）→ 裏を鉛筆で塗る（1枚）→ ボードに転写
（カ）点描

ウ コラージュについて

（ア）心理学におけるコラージュ

心理学では非言語的アプローチの一つとして治療に使われている。

a コラージュ療法の歴史

1970年代、作業療法としてアメリカで導入され、後に芸術療法に取り入れられた。のり、はさみ、台紙、雑誌があれば誰でもいつでもできる簡便さがあり、絵の技術がなくても抵抗なく取り組めること、また絵画療法と箱庭療法の特徴を持ち、相互を補完するものとされている。

b コラージュ療法の実際

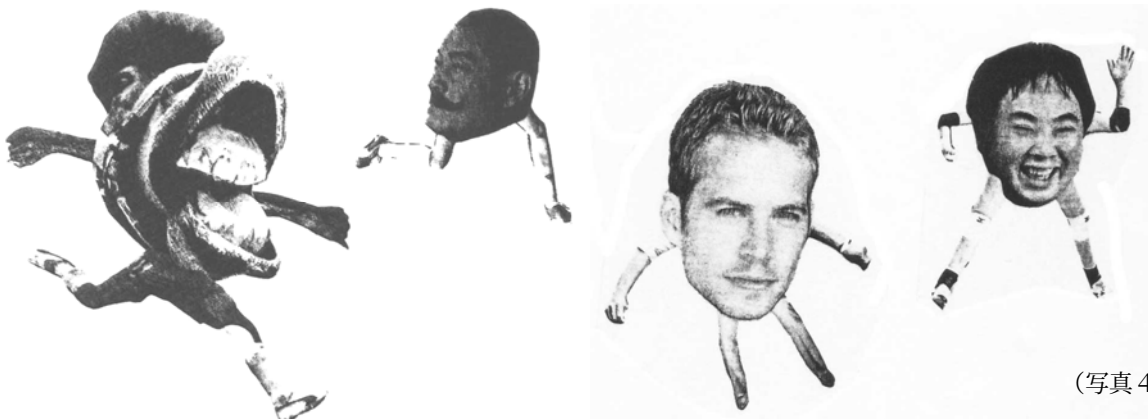
一つの作品にかかる時間は一時間程度。作品の出来よりも制作する過程や制作自体に意味があるとされ、作品を具体的に解釈し、それを伝えたりすることはしない。安心できる環境の中で制作し、またそれについて語ることで自分の気持ちと向き合ったり、問題解決へ近づいたりすることを重視する。何回か継続して制作し、作品の変化を見ていくことが多い。

（イ）高校生の美術作品にみるコラージュ

美術の授業におけるコラージュは、あくまでも美術作品であって治療目的ではない。が、内心のイメージを制作者が非言語によって表現しているという点では、共通しているといえよう。

a 顔人間（頭足画）

コラージュからも「顔」とパーツへのこだわりが感じ取れる。写真を探す際、顔だけ切り取る「首狩族」が横行し、「使おうと思うと頭がないページばかり」と女子が怒り出した。その後次々に出てきたのはこの「顔人間」である。ちなみに「首狩族」は元気系男子に多かった。

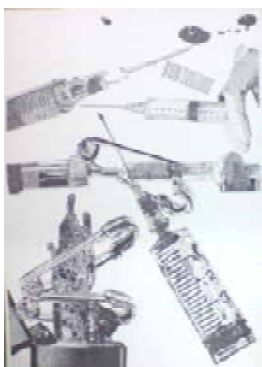


（写真4）

全体の構成よりもキャラを作っているように見え、導入に失敗したかと苛立ちを覚えた。このことについて臨床心理士に話を聞いたところ、「高校生は部分的にしか物を見ていないんですよ」と言われて納得した。例えば「携帯電話のカメラで、何でもいから撮ってきて」と頼んだとき、顔のアップか手を撮ってくる子が多かったのだそうだ。お面に髪を生やすように自画像を描く生徒も、そのようにしか人を認知していないということか。

b その他作例

(写真5)



(写真6)



(写真7)



(3) 自分自身をテーマに描く、ただし自分の顔を描かない –より深く自分を見つめ直す–

ア 題材設定の理由

「自分を見つめる」「自己探求」という主題では多く「自画像」が扱われてきた。自画像のバリエーションは多い。しかしここではあえて顔を描かせない。顔という看板を描かないという縛りの中で自分を表現するには、深く自分の内に降りる作業、または存在感や自分の体温のような、目に見えないものを視覚化するような感覚が要求される。それにより自分の内面や個性を改めて見つめ直し、同時に表現を通して他者の存在に触れ、社会の中で生きていく自分の姿を意識させる。

イ 展開

(ア) エゴグラム (心理テスト)

これで画題を探す訳ではなく、自分の気づかない内面に目を向けるきっかけとして行う。エゴグラムは初心者にも取り組みやすく、安全なわりに奥が深く、面白い結果が得られる。交流分析という心理学の理論に基づくもので、エゴ(自我)のグラム(グラフ)の意味である。

(イ) 要素を探す

自分を代弁する要素をプリント(資料1)に8つ以上描かせる。

作例の提示：自分の部屋、机上、持ち物、自分の親、心象風景、蒐集品、手、足、服、靴等。
2年次のコラージュ技法を応用してもよい。

◆思いつかない生徒には：「名刺代わりに『これが私です』と言えるようなものを」「休日何してる？一日で一番楽しい時間は？進路は？大事にしているものは？部活は？好きな場所は？友達にいつも何て言われる？一番の思い出は？」等の質問をし、自分の特徴を意識させる。

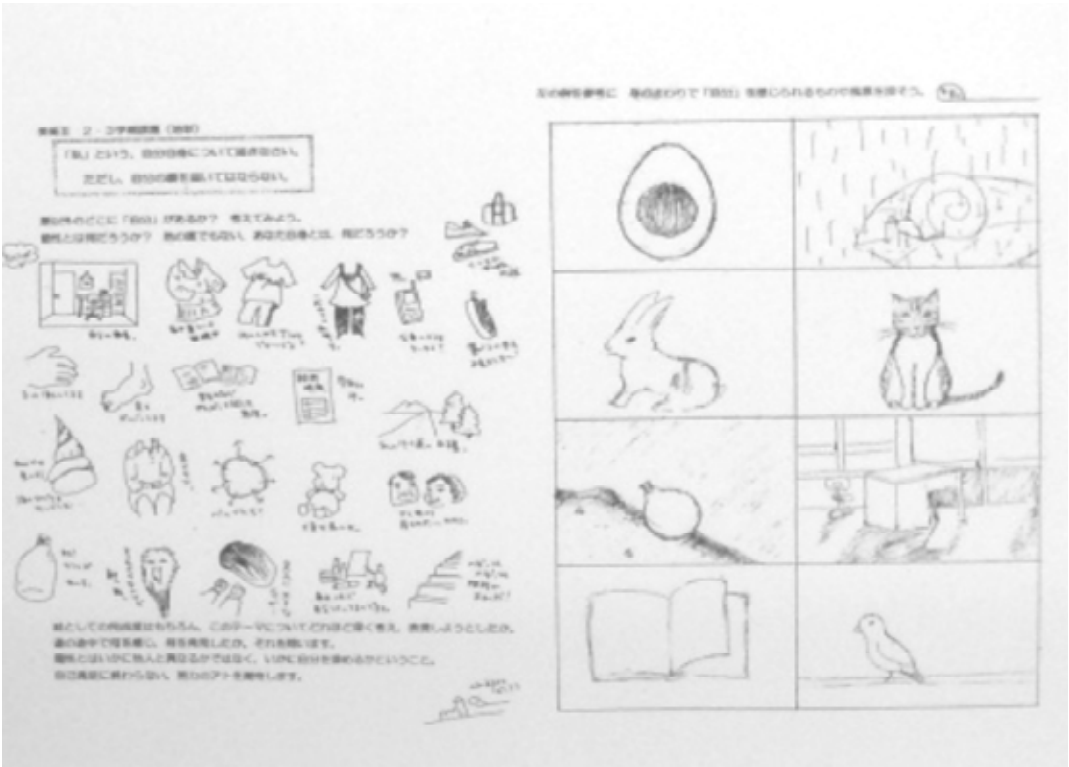
(ウ) 要素 → 構想・構図：「どれが気に入ってる？」「これ見たときちょっとドキッとした」「まだ何かこれっていうのがない感じだけど、どう思う？」「これとこれを併せて一つにするのも有りじゃないかな」

(エ) 着彩

(オ) 制作レポート (資料2)

(カ) 校内展示・職員に感想を依頼

(資料1) 授業プリント



(資料2)

美術Ⅲ 制作レポート										
3年 組 番 名前						年 月 日				
課題：「自分」をテーマに描きなさい。ただし、自分の顔を描いてはならない。										
どうしてこの絵を描きましたか？ どのところに「自分」を込めたのですか？										
描きながら考えたこと、苦労したところ、工夫した点など										
初めての油絵は、どうでしたか？										
描き終えてみて、感想。										
自己評価	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

(キ) グループワーク (50分) 用意するもの：キッチンタイマー、席くじ、メモ用紙、プリント

分	授業の流れ・生徒の活動	指導上の留意点
5	くじ引きで4人班をつくる 自分の作品を持って着席	
5	「今まで皆さんは、絵という言葉で自分を表現しようとしてきました。今日はその絵を使って話をすることで、改めて自分の作品を客観的に観たり、他の人の作品について感じたりしてもらいたいと思います。今日のおしゃべりには、例えばそれぞれの『好きな色』に正解や不正解がないように、合っているとか間違っているとかいうことはありません。思ったことを遠慮なく話すようにしてください。」「話しあいの注意事項を言います。他人が話している間は口を挟まず、耳を傾けてください。他の班の話し合いに首を突っ込まないように。自分の持ち時間は黙らず、話し続けること。聞き手の態度で話しやすさが変わります。何を話すかだけでなく、聞く態度にも配慮してください。」	
5	メモ用紙を配る (一人3枚) 他の班員の作品を見て、質問を一つ以上紙に書く	・質問例の提示「どうして〇〇は△色なの」 「苦勞したところは？」
	全員書き終わったら相手に渡す (手元には3枚の紙が集まる)	進行状況をみながら指示を出す
15	①紙を見ながら、質問に答える②作品を描いた感想を話す (話し手の作品が見えるように置く)	一人3分×4人 時間はキッチンタイマーで区切る
5	プリントを配る ①質問されて感じたこと ②他の人の話を聞いて思ったことについて記入する プリントを班毎にまとめる	他人と相談せず、自分の思ったことを書くよう促す
5	指名された者は班員のコメントを発表する 他の班の発表を聞く	指名し、班員のコメントを読ませる 「1を読みあげてください」
10	プリント配布、今日の感想を書いて提出	「〇行以上埋めること」



- ①くじ引きの理由：普段話さない者と組むことで、いつもと違う場であることを意識させる。友人同士では照れたり、馴れあいが生じる。
- ②班に分ける理由：大人数では特定の者や声の大きい者が影響力を持つ。普段発言しない者にも話しやすい状況を均等に提供し、機会を与える。
- ③時間を区切る理由：②に同じ。
- ④紙に書く理由：話すより、書く方が間接的。話すことに抵抗があったり、慎重な生徒も書くことで思いを伝えやすくなる。

(写真8) グループワークの様子

(ク) フィードバック

職員から寄せられた感想と、前時の感想を印刷して渡す。アンケート実施。

(ケ) 講評

「なんとなく描いた人もいると思うけど、そこに表れたものが一番正直な自分を映した鏡なのかもしれない。すごく考えて描き込んだ人は、そのプロセスも含めて、とてもその人自身を表現した絵になったと思う。そういう目で改めて自分の作品を、友だちの作品を見てみてほしい。」

ウ 単元を終えて

(ア) 作例より

(写真9)

(写真10)

(写真11)



Kさんは、なかなかすっきりとした画題が見つからないでいた。就職が決まって晴れやかな顔で、就職先（パン屋）の商品を描くと言って制作を始めた。パンの質感に最後までこだわり、美味しそうなパンの絵に仕上がった（写真 9）。

Aさんは夕焼けの道にのびる自分の影を描いた。道の端を小さな猫が歩いている。一人が残って取り組んだ最後の仕上げで、雰囲気がぐっと出た。優しい彼女は、いつも周りに合わせて自分をおさえているように見えた。小さな猫、実態を持たない影。描き終わり、そんな自分について考えたようだった（写真 10）。

Mさんは雨の中のかたつむりの絵を描いた。しとしと降る雨の中、葉っぱに小さくかたつむりがいる。遠景に段ボールに入った捨て猫が見える。箱には傘がさしかけられている。思慮深いMさんは、普段自己主張する機会があまり多くなかった。彼女の作品とレポートを、他の職員も興味深くみてくれた（写真 11）。

（イ）制作レポートより（抜粋）

K	「パンが好きなので。食パンとかの“定番”的なところがまあ私の定番キャラとかぶるし。食パンは何つけてもおいしいから、私もそうになりたい。」
A	「夕焼けとか好きで無機質なコンクリートとか描きたくて。自分を一番表すには影が一番いいんじゃないかなあと思ったので、ああいうのを描きました。」
M	「普段の自分は外の世界から自分の心や精神的な部分のようなどころを守ろうとしていっていると思ってこの絵にした。かたつむりや猫に自分を込めました。かたつむりの殻や、猫にさした傘を自分の心を守っているものにした。」「いつまでもこの絵に描いたように守っているだけではだめだと思うから、いつかこの殻や傘をはずして、もっと堂々と積極的になれたらいいと思った。」

（ウ）制作レポート 指導者のコメントより（抜粋）

K宛	「パンへの愛があふれた作品です。食パンはおいしそうだし、フランスパンの質感もよく出ています。Kさんは定番キャラなんですか。そしていろんな人と“おいしく”つきあえる、食卓に欠かせない存在になりたいと。なるほど、素敵です。」
A宛	「途中まで(最後まで?)思うように描けないことに苦しんでいるように見えました。何かに遠慮しているようにも思えました。一人で集中して描いた方がいいのではとも思ったけれど、それはどっちがよかったのかな、わかりませんでした。最後のスポンジ作戦で、絵の雰囲気がぐっと出ました。すごくよかったと思います。」
M宛	「下絵のころから気になっていました。暗闇の中にぼっと浮かぶような、葉やあじさいにも魅力を感じます。胸にあかりがともるような気持ちになります。」「小さなかたつむり、小さな猫、Mさんの優しい視線を感じます。」「Mさんはもっと積極的になりたい、と書いていますが今のMさんも充分素敵だと思える作品です。」

（エ）職員の感想（抜粋）

- ・生徒それぞれの「自分」のとらえ方がよく出ていて、興味深く拝見しました。生徒本人を知っているので、なるほどと納得したり意外性を感じたり、よくがんばったと思います。
- ・生徒の頭の中は、色々な意味で奥が深いと再認識しました。
- ・こんなことを考えていたんだ、と知ることが出来てよかった。

（オ）グループワーク感想（抜粋）

- ・他の2人の苦労したところ、頑張ったところ、気に入っているところ、工夫したところの話聞いて、2人の絵がよりよいものに感じた。

- ・額縁に入った状態を改めて見て、なんとなくちょっとやりきった感があった。
- ・みんなうまくてすごいと思った。先生のコメントも結構おもしろくて、ちゃんと絵の中身を読み取ってくれたと思い、うれしかったです。
- ・絵とは別に、自分の中身というものを今一度考えなおしてみたいですね。
- ・まわりの皆が色々フォローしてくれたおかげで、何とか話せてよかった。
- ・もうちょっと、一人でやる時間を増やした方がよかった。

(カ) 単元の感想 (抜粋)

- ・最初は、はっきりいってあまりやりたいとは思わなかった。でも描いていくうちに、色を重ねたりするのが楽しくなってきた。それに終わってみると、自分自身を見つめ直すいい機会になったんじゃないかと思った。
- ・自分のことを考えたりする授業はあまりないので、それが出来てよかった。

(キ) アンケート結果・GHQ 結果

【実施日 2008.1.15 回答数 14】 GHQ 結果 3.78 (9月比 -1.10)

①課題の意味を理解し、工夫して表現することができたか

できた 3 だいたい 7 あまり 3 全くできなかった 0

②エゴグラムは

よかった 6 まあまあ 7 あまり 0 かなりよくなかった 0

③油絵は

よかった 5 まあまあ 8 あまり 0 かなりよくなかった 0

④描いた後の話しあい

よかった 2 まあまあ 9 あまり 0 かなりよくなかった 0

⑤この課題は全体的に

よかった 3 まあまあ 9 あまり 1 かなりよくなかった 0

(理由) ○真面目にとりくめた

○自分を表現できていいと思う

○構成の時点では難しかったけど描き始めたら楽しかった

○自分を見つめ直すことができた

○話しあいは、皆がどう思って描いていたのかとかがわかってよかった

○初めての経験だったから

○あらためて自分自身を見つめ直すことができたから

×作品の出来に満足してないから

⑥あてはまるもの (複数回答)

- ・自分について考えるよい機会、きっかけになった 7
- ・他人について知るよい機会、きっかけになった 5
- ・好きなように描くことができてよかった 4
- ・絵だけでなく制作レポートも書いた事がよかった 2
- ・制作レポートを書いたことは意味がなかった 0
- ・展示されたことがよかった 1
- ・展示はしてほしくなかった 2
- ・絵を描いたあとの話しあいがよかった 3
- ・友だちの絵を見ることは興味深いことだと思った 7
- ・油絵を描いたことはよい経験になった 10

(ク) アンケートおよび GHQ 結果について

アンケートでは他人や他人の作品への興味が好反応を示し、ある程度目的は果たせたかと思う。特に女子は、普段話さない者とのような形で交流できたことを新鮮に捉えていたようだった。また時期的な理由もあろうが、GHQ（ストレス度）の値が下がった。実施人数が異なるため比較しにくい、特に下がった項目は⑤⑥⑦だった。ほとんど変わらなかったのは⑩で、根強い劣等感を払拭しきれていない。逆に上がったのは③だ。進路が不本意な結果に終わったのだろうか。

(ケ) 考察

a. 【Mさんの絵から】

Mさんの雨の絵が心に残る(写真 11)。Mさんは小さい動物に小さい自分を、積極的になれない自分への歯がゆさを込めている。かたつむりの巻いた殻に、心の逡巡を感じることができる。

ちなみに、「雨の中の私」という心理テストがある。雨の中にいるあなたを描いてください、というもので、周囲からの攻撃と防御の状態を示すという。

Mさんの絵を改めて見てみる。おだやかな雨が降っている。画面は暗いが、葉や花が仄明るく光って見える。やさしくさし掛けられた傘が箱の中の猫を守っている。「箱の中の猫とかたつむりと、どっちがあなたなの？」と聞いてみた。「初めはかたつむりだったけど、今は両方」という言葉が返ってきた。猫は箱から顔を出し、周りを見渡している。彼女はこれから進学する。新しい環境で自分の殻を破っていこうとする自分と、それを静かに見つめているもう一人の自分を描いたのだと思う。見飽きず、いつか自分の胸にも静かに雨の降る心地がする。

b. 【職員の感想から】

「作品のコメントという形をとるだけで、あんなにも自分の事を語れるのですね」という感想を、3 学年のある担任からいただいた。それで気づいた。コラージュ療法と、構造は同じだったのだ。作品を媒介として、想いを語る。美術の作品である分さらに間接的で、抵抗感なく取り組める。

国語力の低下が言われる。順序だてて何かを話したり、説明したりすることは本校の生徒も大変苦手とする。適宜質問をはさんだり、補足や推察を重ねながら彼らの話を聞き取らなければならないのが現状だ。「～について悩んでいる」と相談に来ることのできる生徒は、既に半分問題は解決できている。本校において教員が目向け、救いあげなければならない生徒は、何について悩んでいるのかわからなかったり、自分が悩んでいることや困っていることを認識できないでいる生徒である。「絵は、子どもが自分の環境をどのように知覚したらよいかの一助となりうる」(*2)。美術の授業は、自分の内面を認識したり他へ伝えたりする手段に乏しい生徒の心をうかがい、言葉を引きだす方法として、ひとつの有効な役割を果たすことができたといえるだろう。

5 まとめ

フィリップ・ワロンは絵の心理学的解釈の研究について①知能指数の面からの検討②精神分析的アプローチによるシンボルの分析③発達の観点の三つに大きく区分している。実際の解釈にあたっては「周到的な注意」と「訓練と直観と機転」が必要であり、安易に真似のできるものではない(*3)。美術の授業で制作された作品はあくまでも美術作品であり、この研究は、美術の授業で作品を使ってカウンセリングをしようとする事では決してない。

ヴィドロッシェ(1965)は「絵の教育」と「絵による教育」を区別した。「心の教育としての科目性」は後者に入るだろう。絵を手段とする教育もまた、私たちの範疇なのだ。しかし、学

校は未だ「絵が子どもの心理的な発達において、とりわけ恵まれない環境にある子どもにとって、重要な要素であるという見地にたっていない」「新しいテクニックを、わずかずつ子どもに教えることで満足している」(*2)という指摘がある。

私たち美術の教員は、どのように「心の教育としての科目性」を活かし、「絵による教育」をすすめていけばよいのだろうか。

コラージュや自画像の項で見てきたように、作品は認知や知覚の状況を明らかにする。逆に言えば、デッサンの練習が、認知や知覚の訓練ともなりうる。

また、作品だけ見るよりも「子どもをよく知るほど、その意味をはっきり読み取れるようになる」(*4)。このことは、日常的なやり取りや交流が「絵による教育」には重要であることを示唆している。

以上から次のことがわかる。特定の課題のみが心を育てるわけではなく、作品はいつでも心や脳を映す鏡だ。そしてそのことを知りながら、そのことに興味・関心をもって制作を見守り、指導にあたることで「絵による教育」の効果をあげることができる。

共に在り、寄り添う。その「カウンセリング的な態度」を、美術は授業の中で容易かつ自然に実現することができる。作品を通じて彼らの言葉や発見を引きだす。言葉の力を多く持たない生徒たちの自己表現や自己理解に貢献し、授業を通して生徒指導に広く予防的にかかわることができる。この特質に着目し、活かすことは知識・技能の訓練と何ら相反しないのではないだろうか。

象徴を読み解く必要はない。作品の見方を変える必要もない。ただ少し、心と作品の関係に関心を持って指導する。それが生徒の心の奥の、未だ形にならない何かを動かし、評価や巧拙を超え「表現するのも悪くない」と感じてもらう、確かなきっかけになる。

6 おわりに

広げたふろしきを何度もたたみ、折り直してはまた広げた。一時は美術さえ嫌いになりそうになった。少しでも興味を持ってくださった方がいれば嬉しい。

この研究を通して心理学の端緒に触れ、今まで経験的にやってきたことの裏づけや理由を得た思いがした。また、どんな作品にも、より面白みが感じられるようになった。

思春期・青年期において、私自身が美術にいかに助けられてきたか。そしてその思いを、できることなら生徒と共有したい。この研究を通じ、それが美術で私が生徒に伝えたいことだ、とわかった。

研究の途上、折にふれて私を勇気づけてくださった臨床心理士で松戸南高等学校前スクールカウンセラーの中村裕子先生始め、お世話になりましたたくさんの先生方と、松戸秋山高等学校及び松戸南高等学校の生徒たちに、心から感謝します。ありがとうございました。

引用文献 (*1)「美術 自然から学ぶ2」p27	現代美術社 (昭和 63)
(*2)「子どもの絵の心理学入門」p107	フィリップ・ワロン 著 白水社
(*3)「子どもの絵の心理学入門」p93	フィリップ・ワロン 著 白水社
(*4)「子どもの絵の心理学入門」p97	フィリップ・ワロン 著 白水社

参考文献「新・エゴグラム入門」	津田太愚 著	イースト・プレス
「コラージュ療法 基礎的研究と実際」	杉浦京子 著	川島書店
「現代のエスプリ コラージュ療法」	森谷寛之/杉浦京子 編	至文堂
「授業改革の方法」	市川千秋 監修	ナカニシヤ出版